令和５年１１月１６日（木）１３：３０～１５：００

東京グリーンビズ
アドバイザリーボード（第４回）

１．前回の振り返り

２．東京都の取組

３．委員によるプレゼンテーション

４．意見交換

アドバイザリーボード　メンバー

（以下、五十音順）

安藤　光義　委員（東京大学大学院農学生命科学研究科教授）

伊藤　香織　委員（東京理科大学　創域理工学部教授）

小川　みふゆ 委員（東京大学大学院農学生命科学研究科特任研究員）

小林　光　　委員（東京大学　先端科学技術研究センター研究顧問）

酒井　秀夫　委員（東京大学名誉教授）

島谷　幸宏　委員（熊本県立大学　特別教授）

下村　彰男　委員（國學院大學　観光まちづくり学部教授）

吉高　まり　　委員（三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社フェロー（サステナビリティ）
東京大学教養学部 客員教授）

渡部　翠　　委員（株式会社ユーグレナ　３代目CFO）

前回の振り返り

第３回会議でのプレゼンテーション（振り返り）

○「これからの100年を見据え、東京の緑に必要なこと」をテーマとし、３名の委員から、**林業、公園、Z世代の観点によるプレゼンテーション**を実施

委員名	要旨
酒井 秀夫 氏 **東京大学名誉教授** **【林業】**	● 林業を成長産業とするために、**森林の資産価値**をいかにして上げるか。残存木の品質、健全性、成長量は、**繰り返しの間伐によって改善** ● **択伐**（天然更新による植えない林業）という手法もある ● 林業はリードタイム（木材搬出までの期間）が長いことが欠点。備蓄による**リードタイム短縮や需給調整、サプライチェーンの確立が必要** ● 魅力ある林業づくりに向け、東京トレーニングフォレスト（伐採・搬出技術者育成研修）などの**人材育成・確保が重要**
下村 彰男 氏 **國學院大學** **観光まちづくり学部** **教授** **【公園】**	● 江戸・東京は、**多様な自然に恵まれているとともに、それらに支えられ発展したことを伝えるべき** ● **都には自然史博物館がない**ので、都民は自然に深く支えられてきたことをあまり認識していないのではないか ● エリアや場所の**特性・歴史を物語る「みどり」を地域資源**とすべき ● 「みどり」の活用・管理には適切な人為が必要。**公園を地域コミュニティ再構築の拠点**とすべき ● これらを通じ、多様な自然と豊かに触れ合う共生社会を実現し、**ふるさと意識（帰属意識）の醸成**を期待
渡部　翠 氏 **（株）ユーグレナ** **三代目CFO** **【Z世代】**	● 緑に関する若者を中心とした**アンケートを実施** ● 都内の緑地は分散し、アクセスしづらいため、**緑をつないで回廊**とすべき。一方、緑を増やすと**維持管理のコスト・人手不足**が課題 ● 緑化に関する**認知度は低いが、関心は高い。**行動変容にはインセンティブが必要。例えば、**コミュニティ通貨を活用する仕掛け**を提案 ● 持続可能性や緑など、**感覚や意見は人によって全く違う** ● 東京は人とアイデアが集まる所。**若者はWell-beingが保障される街を望んでいる**

第３回会議で頂いた主なご意見（振り返り）

○プレゼンテーションの終了後、**各専門分野の視点も踏まえながら、委員から様々なご意見**を頂いた

（頂いた主なご意見）

・**森林環境譲与税**をどのように活用するか。**東京産材の利用を促進**するため、需要を創出し、マーケットを創ることは重要。港区の「みなとモデル」は参考になる
・地形と歴史を踏まえた**個性あるみどりの創出が必要**
・目指すべきみどりのコミュニティを創るに当たって、**公園の規制の洗い出しや規制の緩和が重要**
・意識の変化のためにも、**多摩産材を見えるところに使う**ことが重要
・**自然史博物館**はあった方がいい。ただ、建設には時間が掛るため、江戸博を活用し、文化を中心とした博物館でも文理融合を図り、生き物と人の関わりの歴史を展示するべき
・生物多様性に対する住民意識の変化のためには、**伝統的な知識や地域の知恵が大切**
・緑の回廊を作るには、**ネットワークづくりを支援する団体等に話を聞くことが重要**
・木材の活用には、**投資家などに木材の最終的な価値を見せることが必要**。CLT建材はその価値がまだまだ見えない。
・開発が害だという意見もあるが、インセンティブと規制がない限り、良心に頼っているだけでは回避できない。**エンバイロメントバンク（自然豊かな土地にして価値を上げて売る）のような仕組みが必要**ではないか
・承認要求が満たされ、**行動変容を起こすようなシステム**が、インプリントされる形でやると人は動くのではないか
・前回は100年後の生物多様性を含め景観がどうなるかの話だった。今回は**100年後の緑、文化**の話になり、**安全・安心**という言葉も出た。これに**健康や安らぎ**を入れ、広く深く考えていきたい

第３回会議で頂いた主なご意見（振り返り）

（頂いた主なご意見）（続き）

・木材利用も非常に重要で、建築は進んでいるが土木で進んでいない。**東京都自らが利用**をするのが良い
・海の中にも海苔などの緑があり、川などの水辺を利用した緑化を考えると**回廊化も非現実的ではない**
・緑にはどういう機能と価値があって、元々の自然にどう手を加えていくか、歴史を含め**100年後を見据えた教育が大切**
・**新しい概念と今までの施策をどのように融合し、どう繋ぐかがポイント**
・世代が変わり、**価値観が変わってきている**
・新しい仕組みが求められている中で、これまで我々の分野で議論が出来ていなかった**金融などを含めた議論が必要**
・私たちの世代でも行動意欲のある人はいるので、その力を**どのように地域に還元するかが重要**
・インセンティブがないと人が動かないという話もあったが、**高校生や大学生だけでもまず始めてみるのが大事**
・新しい自然と文化を東京から発信しなければならない
・クオリティがいいことをしようと思うと、**お金と労力をどのように確保するかが課題**
・次回は、**グリーンビズについてどう動かすのが良いか**議論したい
・都には、すぐにできることとそうでないことがあるが、今後の取り組みについて話をしてもらい、単なる**ディスカッションに終わらせない工夫**を考えて欲しい

東京都の取組

東京都が進めている緑に関する取組

「東京の緑に関する都民アンケート」

〇各種イベント等において、**子供や大学生へアンケート等を実施**

〇こども向けアンケート（18歳以下）

- イベントに参加した子供達へ意識調査を実施（選択式）

（質問1）普段生活している中で緑を見たり感じたりしている場所
（質問2）今後、緑が増えて欲しい場所
（質問3）緑のある場所でどんなことをしてみたいか。

〇大学生アンケート

- 東京都立大学への出前授業にあわせて、東京都の緑施策に関するアンケートを実施

（質問1）100年先を見据え「みどりと生きるまちづくり」を進めるために必要な取組（選択式）
（質問2）緑を増やしたり、保全していくために、東京都がすべき具体的な取組（記述式）

〇東京の緑・景観・屋外広告物に関する世論調査（令和5年11月10日（金）～12月3日（日））

- 東京の緑に関する都民の意識や意見などを、無作為に抽出された4,000人に調査

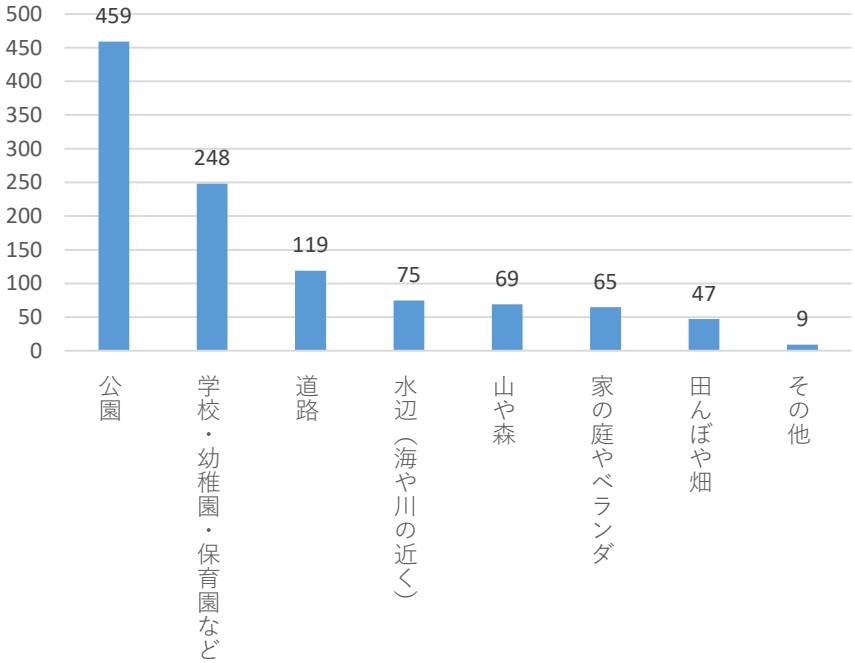
〇若者から新たな提案をもらう機会（検討中）

こどもアンケート

○**開催日時：**令和５年10月14日~15日　FUN MORE TIME SHINJUKU（西新宿）
10月19日~22日　上野恩賜公園開園１５０周年総合文化祭（上野公園）

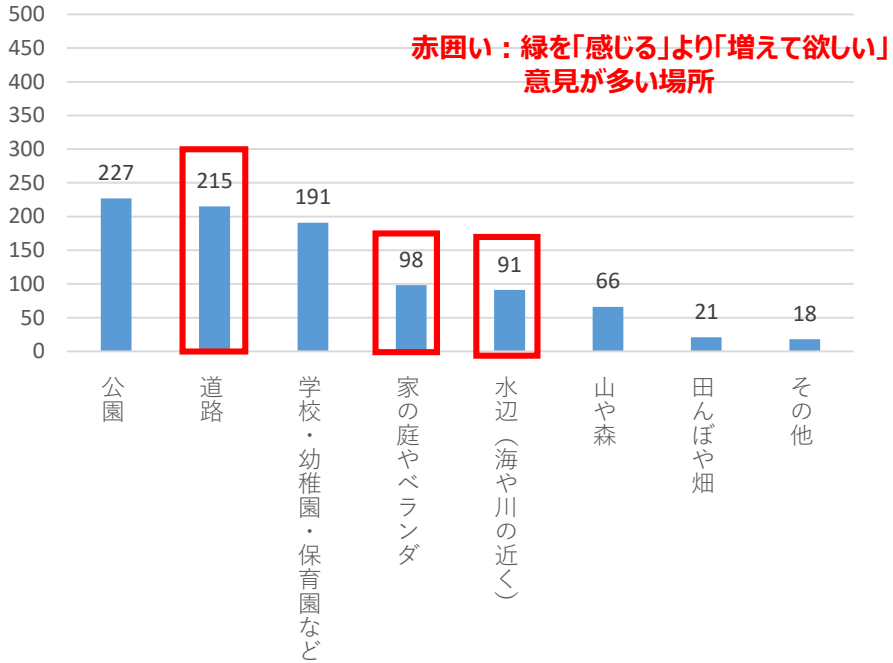
○**対　象：**18歳以下　549人
①0~6歳 156人②7~9歳 112人③10~12歳 73人④13~15歳 72人⑤16~18歳 136人

○**質問（１）**
あなたが普段生活している中で緑を見たり、
感じたりしている場所はどこですか。（３つまで）



○その他（自由記入）
・すべての場所・寺神社・ビルの周り・駅・動物園　・病院の庭

○**質問（２）**
今後、あなたはどんな場所に
緑が増えてほしいと思いますか（３つまで）

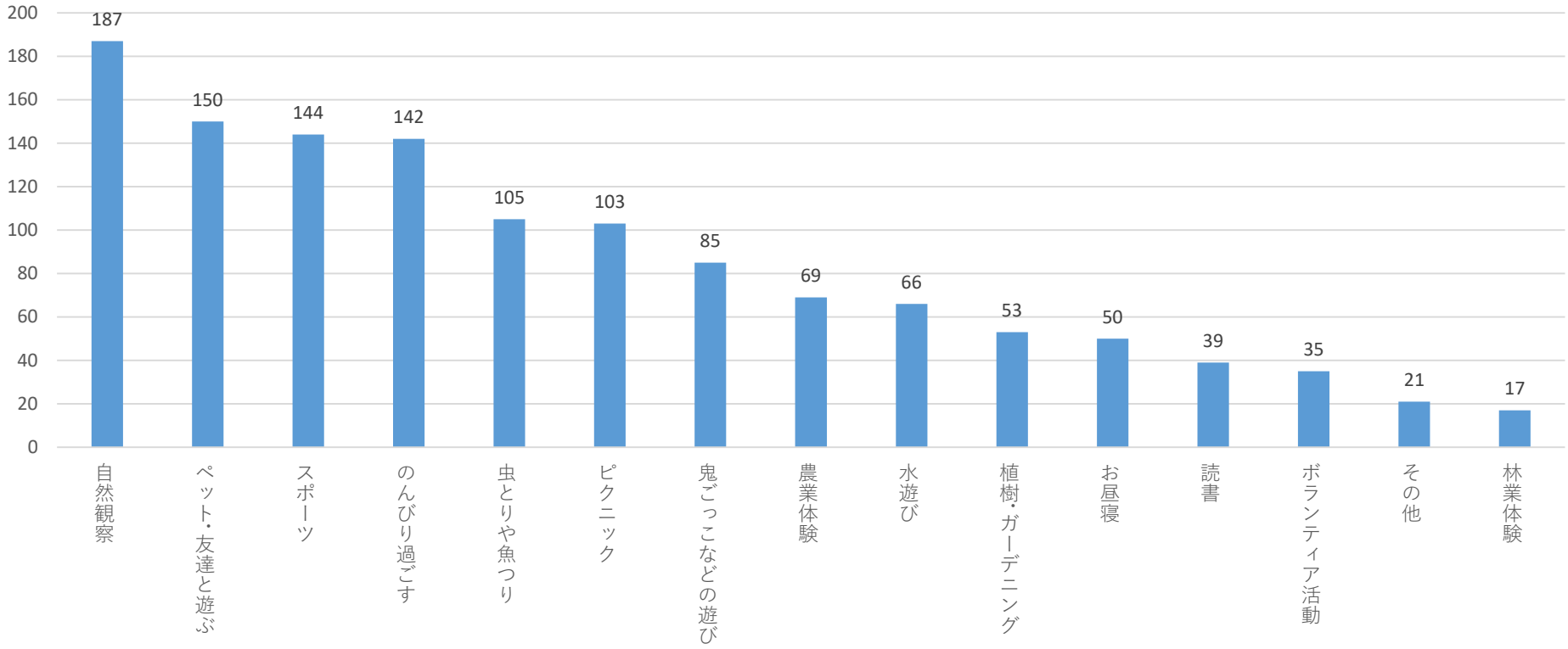


○その他（自由記入）
・全ての場所・十分である・町中・ビルの周り・家・駅・公共施設
・ホテルの周り・博物館・動物園

こどもアンケート

○質問（３）

あなたは、質問（１）、（２）で答えた場所でどんなことをしてみたいですか。（３つまで）



○その他（自由記入）

・散歩・かけっこ・ゲーム・アスレチック・木登り・BBQ・キャンプ・花の観察・自然と触れ合う
・ミニ電車・自転車・全部・お祭・デッサン・鉄棒・ボート・ブランコ・モノづくり・ラクロス

大学生アンケート

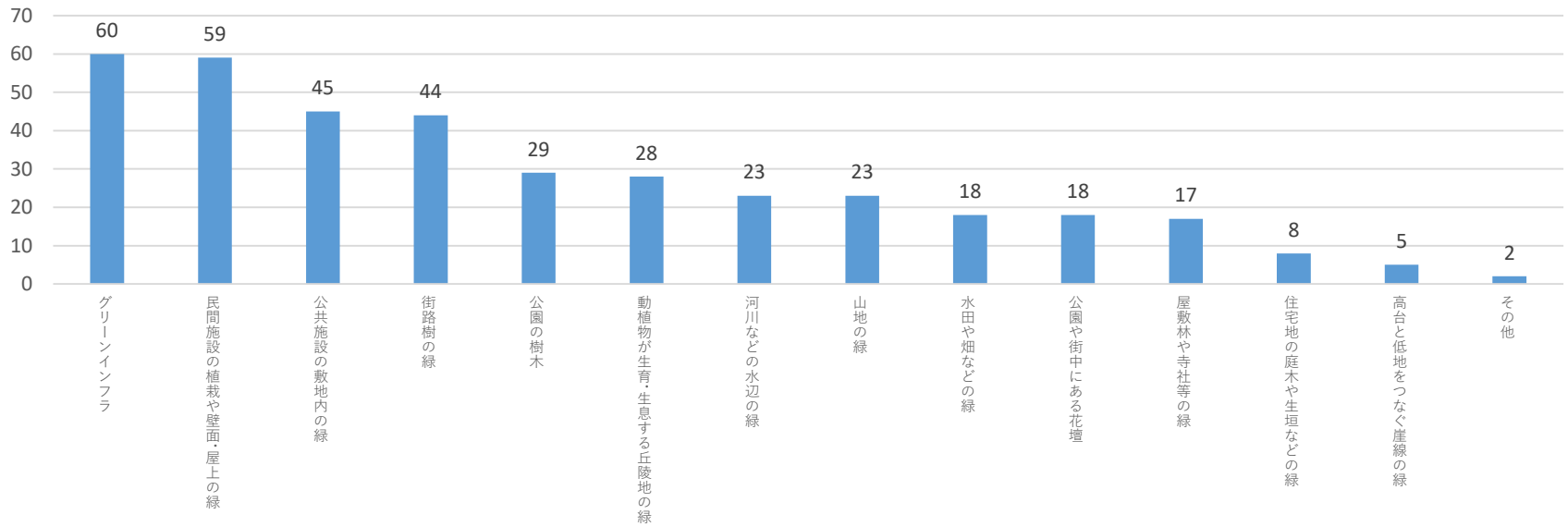
○開催日時：令和５年10月18日（水）

○対　　象：東京都立大学　　現役学生137人

○質問(１)

100年先を見据え「みどりと生きるまちづくり」 を進めるためには、どのような取組が必要だと思いますか。
この中から3つまでお選びください。

○回答



○質問(２)

（２）（１）で選択した緑などを「まもる」「増やし・つなぐ」「活かす」まちづくりを進めるため、東京都は具体的にどのようなことをすべきか、あなたの考えを記入してください。

○回答　次ページ以降参照

大学生の主な意見

緑を「まもる」取組

➢ 生物多様性について

- ◆ 人々が自然(みどり)を嫌う最大の理由は虫であるため、**虫対策が必要**
- ◆ 豊かな緑と生き物の保護は大切だが、その**緑と常に生きている人々の補償**をすることも大切
- ◆ 動植物が繁殖し共存できるように**動植物目線での街づくり**

➢ 屋敷林・寺社林について

- ◆ 寺、神社の保有する伝統的な緑を壊さない

➢ 森林・山地の保全

- ◆ Vegetation（植生）を意識して、人工物にならないような取り組みをすべき
- ◆ 山地は土砂災害を防ぐとともに、観光地や木材として利用できる道を模索する（里山として活用）

➢ 保全地域について

- ◆ 緑に対する関心を高めた上で開発することが、長スパンで価値を高めるために必要
- ◆ 緑の創出もとても重要であるが、**まず自然の破壊を防ぐことを重点的に**取り組むことも大切

大学生の主な意見

緑を「増やし・つなぐ」取組

➢ グリーンインフラについて

- ◆ 植物を育てるだけでは、スペースもなく困難。水害対策や猛暑対策を兼ねて、緑を増やすべき
- ◆ シンガポールのように**氾濫原の機能を持つ公共空間**を作る。水害対策と緑化を併用できたら画期的
- ◆ ニューヨークのフライアントパークを参考とした**民間と連携したグリーンインフラ**の設置
- ◆ 国外の例だと、市民が遊ぶ緑を確保する役割と水害に対処する役割の相方を担う
- ◆ **その場所にメリットがある樹木選定**（避難場所：竹林　住宅密集地：燃えにくいシラカシ、ヤマモモなど）
- ◆ 道路の水はけの良さは災害面だけではなく、都民の生活のしやすさの面からも整備のメリットは大きい
- ◆ グリーンインフラはメリットを多く生みだせる緑なので、**町中に馴染むようなグリーンインフラ**を作る
- ◆ **都市環境と自然環境の調和は不必要**。災害が激甚化する中で被害対象を増やすことは適切でない
- ◆ 東京は土地が狭いのでグリーンインフラを整える際に、地中や人工物を活かす必要がある
- ◆ 水害や土砂くずれを防ぐために**地盤強化が図れるような植物**を植えること
- ◆ 災害が起きた時に対応できるようにするために、**外観よりも優先してグリーンインフラ**等を造るべき
- ◆ 河川の付近に樹木を増やし、**氾濫した際のストッパーに**する

大学生の主な意見

緑を「増やし・つなぐ」取組

➢ 開発に合わせた緑の拡充について

- ◆ 海外諸都市のように開放的な緑空間を整備を進めるべき
- ◆ 建物を建てるときに緑化の評価割合を増やし、自然と調和した建物を建てることを推進する
- ◆ 民間企業に対し、**施設の体積に対し一定割合以上の緑の体積をつくることを義務付け**る
- ◆ 屋上や壁面等の緑を導入したビル等への減税や補助金を取り入れていくべき
- ◆ 民間施設に一緒に植えられた緑は解体時に撤去されるため、人工物と緑は独立したものとする
- ◆ 新宿御苑やドームシティのような**観光と緑が両方楽しめる施設**を作る

➢ 緑のネットワーク化について

- ◆ 河川では水辺の植樹とともに、河川にあるゴミの撤去、雑草除去、美化も併せて行う
- ◆ **都営地下鉄駅の通路などに花壇**などを整備し、臭いのこもりがちな地下の美化にも役立つ
- ◆ 川沿い・道沿いに木を増やせば、涼しいし、街を歩くのが楽しくなる
- ◆ 樹木のような大きい植物ではなく、**比較的小さな植物を街中に設置**する
- ◆ 緑を植えた場合のメリットを与えることで、個人住宅の庭に緑を増やすインセンティブを与える
- ◆ 区市町村と協力し何年までに何haの緑地をつくるなど**具体的な目標**を立て、植林プロジェクトなど実行

大学生の主な意見

緑を「増やし・つなぐ」取組

➢ 道路における緑の創出について

- ◆ 公園や街路樹だけでなく**建物や道路自体を緑化**していけるような仕組みを作っていくべき
- ◆ 街路樹に季節を感じられる木を植え、人々に緑に対して親しみを持たせるべき (桜、きんもくせい等)
- ◆ **街路樹はCO2を減らすという観点で定期的に植え換え**をすることで、災害時のリスクを減らせる

➢ 公園について

- ◆ 全ての公園整備は非現実だが、利用頻度や人数、立地等に応じて優先度をつけ荒地から緑地化すべき
- ◆ 公園の樹木は子どもの遊ぶ場所としても重要

大学生の主な意見

緑を「活かす」取組

➢ **緑に関する情報の発信について**

- ◆ **「グリーンインフラ」という言葉の認知度を高める活動**をする。ex)教室をひらく、動画をつくる
- ◆ 小学生や中学生を対象に、実際に町や緑地に訪れてまちづくりについて学ぶ機会や体験があると良い
- ◆ 町の中心部や目につく所の緑を増やすことで都民一人一人の意識の向上にも繋がっていくのではないか
- ◆ 行政が様々な取組を行なっているというＰＲは都民の緑を大切にする意識を上げる
- ◆ 緑を増やしていくために、幼稚園、小学生など年頃の人達への緑の重要性を教える場を確保する
- ◆ 緑を増やそうと数値のみに捉われず、**地域の人々と協力しながら維持・管理していく仕組み**を整える
- ◆ **小さな頃から緑に囲まれた地で過ごす経験を積む**ことで、自然と自分が緑ある町と共に暮すと思える
- ◆ 小学校の授業で1クラス1本でも良いので植樹体験をし、地域を離れるまで木の成長を見れるようにする
- ◆ 子供が行く場所に緑を設置し、緑に対する親しみを覚えさせ「みどりと生きる」考えを抱いてもらう
- ◆ 小学校で年２くらいのペースで家族と緑のふれあいイベントみたいなのを開催するように義務化

大学生の主な意見

緑を「活かす」取組

➢ 都民との協働について

- ◆ 地域の人々や子供たちが花を植え、育てることで、植物の重要性を学ぶと共に、地域の連携も強まる
- ◆ 「緑」の保全は環境保護のためだけでなく、**地域住民の憩いの場、コミュニティの形成の場**になる
- ◆ 「まもる」「増やし・つなぐ」という観点で、公園の花を植える、育てるボランティアを実施すべき
- ◆ **都内の農地で収穫された農作物を販売できる環境を促進**する。新たなブランドを作る
- ◆ **公園などの花壇は職員だけで植えるのではなく住民参加型**にし、都民も一緒に緑をまもり、増やしていく
- ◆ 適切に管理していくための人材の確保が必要である（大学生などの単発アルバイトとしての確保）

➢ ＥＳＧ投資・ファイナンスについて

- ◆ 資金の確保が重要のため、まちづくり情報を積極的にメディアで発信、その他の媒体での発信が重要
- ◆ 緑の保全が重要なので、農家への補助金や森・河川の管理団体の組合を作り活動を強化していく

委員によるプレゼンテーション

「これからの100年を見据え、東京の緑に必要なこと」

・小林　光　　委員